



續五三

文
137

5
693



利
號 693
卷

東京生田區大塚
餘下町吉松蔵地
坪内蔵

清純有論

論

清純有論

明治三十二年十一月五日
坪内蔵氏寄贈

支考稿

此書のあは三本ある一冊月は風流を
風流の類やあは三本ある一冊月は風流を
所一は風流の類やあは三本ある一冊月は風流を
と流を世俗の類やあは三本ある一冊月は風流を
敵とては能流を三本ある一冊月は風流を
あは三本ある一冊月は風流を三本ある一冊月は風流を
死をいひては三本ある一冊月は風流を

入稿



是をく者七能信しあもくおとるそくしんは
 一七あゆむやき一能信の白由くらく
 五のうふつくしんせありあもれと一本一草も
 あらふもさしつてはておれつげしうめつひく
 二あさつめさしつてはておれつげしうめつひく
 とらふ一一人きき一能信のふあましし
 きき信し一能信をいぬくかきあもあさあら
 ちり一能信のふあましし
 有信のものさしつてはておれつげしうめつひく
 うらつりさるる素色あもくおれつげしうめつひく



祥雲何
 物ら
 意
 三
 の

一七あゆむやき一能信の白由くらく
 五のうふつくしんせありあもれと一本一草も
 あらふもさしつてはておれつげしうめつひく
 二あさつめさしつてはておれつげしうめつひく
 とらふ一一人きき一能信のふあましし
 きき信し一能信をいぬくかきあもあさあら
 ちり一能信のふあましし

一七あゆむやき一能信の白由くらく
 五のうふつくしんせありあもれと一本一草も
 あらふもさしつてはておれつげしうめつひく
 二あさつめさしつてはておれつげしうめつひく
 とらふ一一人きき一能信のふあましし
 きき信し一能信をいぬくかきあもあさあら
 ちり一能信のふあましし

風箱のゆきけりーとつねとちやうやく
さ月君出さちぬまき身をききんぬ人の紙
わさやさささささささささささささ
ぬくぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ささささささささささささささささ
よりちとちとちとちとちとちとちとち
ま〜ぬやのふらちら海ー志う結とて人垂屏風
屏風れうらちちとちとちとちとちとちとちとちとち
あ〜ぬまきぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
さ〜ちさささささささささささささささささささささ
ささささささささささささささささささささささ

手紙ありて馬子
見紙ありてと
やあ〜ぬまき人
ねつささささ
ぬぬぬぬぬぬ
さささ

元柳ささささささささささささささささ
やささささささささささささささささ
入垂屏風ありさささささささささささ
松のちさささささささささささささ
風箱君ささいやささささささささ
ありさ風箱ありさそれささささささ
くこれに箱ぬきさささささささささ
をあら〜ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
ささささささささささささささささ
新紙さささささささささささささ
銀屏のとも

文庫

このりもそれかたを城のあつりうりあきら
法屏やかういへん奥つゝき次すゝの度女
み塚れ月新もきくせき編りお陰お色添
如水こつ一れこれお君ありさ故おしん娘れ
人金屏をあられゆらいてこれゆきさくらをな
や又し後の法屏をもし屏れくれやうて
れひ法屏を法屏おやうて西も七法屏を
お陰りしともしおの風物やこのお陰
風物のあつりとをりうけをて御法
ま終るくやうあゑ——

海うろ海

信・能・このあきる色もあきあきあき——
ま・を・た・れ・ら・あ——てんれらうんうら
る・を・つ・あ・や・あ・ら・る・れ・あ・き・あ——あ・ゆ・れ
う・法・を・し・や——け・ぬ——御・を・て・十・九・年
の世情あきこらと考子を五ふ人あ言れ世法
あきく法屏くお君あまよちとらわれきん
まわらうやきくつらあきくおのるこし
あきあきあきこら世あつらるれ風物うらうら

法屏はあきあき
と打つてあきあき
ありあきあきあき
あきあきあきあき
あきあきあきあき
あきあきあきあき
あきあきあきあき
あきあきあきあき

大書

五世帝と云ひ五戒と云ふ事をもてしむるに
 のありし事なることよく人々の心に
 せむしつて居りて其の人を説く
 る法ありしなりと云ふに
 ありしが此の人の名は
 ことごとく神の御
 ことごとく神の御
 ことごとく神の御
 ことごとく神の御
 ことごとく神の御
 ことごとく神の御

神の御

しりし事なることよく人々の心に
 せむしつて居りて其の人を説く
 る法ありしなりと云ふに
 ありしが此の人の名は
 ことごとく神の御
 ことごとく神の御
 ことごとく神の御
 ことごとく神の御
 ことごとく神の御
 ことごとく神の御
 ことごとく神の御

八景

のこころをわくわくし能くうとては風流をくん
と多に化後とりくも肥とも田舎にふる後の
男後の世もいふやうありしきこころ口よの
心もいふるやういふてふれと多に化後あり
侍らんこころありしきこころいふるやうき
人ありしきこころありしきこころありしき
とありしきこころありしきこころありしき
とのうけをいふれと多に化後ありしき
風流の人をいふるやういふるやういふる
まにいふるやういふるやういふるやういふる

のこころをわくわくし能くうとては風流をくん
と多に化後とりくも肥とも田舎にふる後の
男後の世もいふやうありしきこころ口よの
心もいふるやういふてふれと多に化後あり
侍らんこころありしきこころいふるやうき
人ありしきこころありしきこころありしき
とありしきこころありしきこころありしき
とのうけをいふれと多に化後ありしき
風流の人をいふるやういふるやういふる
まにいふるやういふるやういふるやういふる
いふるやういふるやういふるやういふる
今これ世の化後ありしきこころありしき
額うらゝゝ時節の化後ありしきこころありし
おもひはなれはるやういふるやういふるやう
いふるやういふるやういふるやういふる
いふるやういふるやういふるやういふる
いふるやういふるやういふるやういふる
いふるやういふるやういふるやういふる
いふるやういふるやういふるやういふる
いふるやういふるやういふるやういふる

御傍のよま地也をのれうらめ色と云ふは
 きののしにをたて口め風箱のさひをい
 るんからるん口れうらあふひといえれ
 ぬー風箱の卒ひりーぶめのやせ色美
 大有のえ上のをたれーとせきのーぶめあゝの
 海ーのそをたれーにがひさひーさめあて
 ぶーさひをさめーもやーのうらめを
 ろめあもひていーきもひのれめそい
 ろめあもひていー風箱のさひあゝん
 ーのそをたれーとせきのーぶめあゝの

のそもあらをさすのそいふもあゝん也
 海もあゝんもさすをたれ世の能傍もさす
 かゝりあもあらゝあの人々の勝の人らゝ
 能傍もさすあら世の人より世をさす
 世のわに福なりあもさしてあも傍ろがも
 たりていゝとあゝさるぶか一也世も自慢
 とりもさすたれをたれらあもさすのあゝぬ
 くのさもあらゝのれらゝあもあゝん
 ーさすさゝらゝのさゝらゝのれあゝを
 おのあゝんをあらゝらゝのれらゝあゝん

又論

自然と師と
とと
とと
とと

この自然なりよりよく本一より自然あり
天地のまを情をま〜んぬゆ此自然あり
このこのありらる師後のつゆ也さたるは
偏ハ何をさるゆ〜んぬ〜んぬ〜んぬ
あり〜んぬ〜んぬの風船のま〜んぬ
もやPは〜んぬ

Very faint, mostly illegible bleed-through text from the reverse side of the page.

新古論

仙流よ新古ありとちき守武宗鑑より貞地
貞地まの〜んぬ〜んぬ〜んぬ
ゆ〜んぬあり〜んぬ〜んぬ
〜んぬ〜んぬ〜んぬ〜んぬ
〜んぬ〜んぬ〜んぬ〜んぬ
〜んぬ〜んぬ〜んぬ〜んぬ
〜んぬ〜んぬ〜んぬ〜んぬ
〜んぬ〜んぬ〜んぬ〜んぬ

又論

東坡の書々風流をすむひ類ハ人ぬ者人
のこころを法くく定家書々の風格紙
志ふ家紙宗書に連類みまこくあは
か川流人カこころさくあ流をれ流并は能み
風情風流あれふらんあり是れと并まは
不くはよ何くいさくさくひもあは人
世と此人のまことと 辨言ロカの人者 裸^{ヌカ}も
去園ありーこまるとま〜んらあふれは者
うつとまるとつ〜ん 孫孫御一 漏をよりー
ま〜んま〜ん人此年〜く若サーりよま

五仇借ハ風
情のすまを
家ととら
あつと理
あつと理
あつと理

風流あり〜風情なるふま〜人あり〜
いあ〜ハハ能流を風情あり〜風流ありー
そ流も風情のま〜は意鏡ありれ能れ
ま〜とま〜ま〜ひつ〜んハ風情ま〜ま〜
あ流もあつとま〜とま〜理ま〜ま〜あり〜
ふと〜あま〜風情ま〜代の能流のま〜あり
まのま〜風情のま〜ま〜風流あま〜ま〜
ま〜ま〜流ありーあれ人我もあ風の能流
ま〜人ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜
の能流能流をま〜ま〜い〜ま〜流ま〜乃

五仇借

二

中世のついでに新右のさうひをきくね人
のひひあつて　さすれんち今集あみ細流のあま
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり

きんげの中あありさか　こふ人を流る連
佛の祖あ　さつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり

久きうらや　細そ中よ　大井川
是中は何人の白きやあつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり
あつていれさすれとあまのあつてこのあつてあり

かり〜ハあまなめあ月雨とさ〜
 波あまなれあうけ〜
 きたれん尺海〜のまよいそ〜
 波あハ海あうりて曇くさ川き〜
 細それ海うり〜
 きたらひら波あ海あ〜
 ちかきそ〜
 花うり〜
 ぬきぬき〜
 山〜

坊々ききり〜時書れ海はうり〜
 尺をゆり〜にけ二白をキ〜
 きた〜
 あり〜
 きた〜
 中〜
 きた〜
 山〜
 山〜

又二冊
 十一

此の歌は乃木兼光
の遺言に
てありし

娘ハ此の世のちいぢひぢい一途ハ此の世に
沈みし世終しふふまぬふいあぢぢい
を風箱の如くやうぢい
徂落をさるふれやうぢいあぢぢい
やうぢいとのしぢい吾門もあやうぢい
ありし服あめさるぢいあぢぢい
せしぢいぢい一切まてめをぢい
附うぢいぢいぢいぢいぢい
あぢぢいぢいぢいぢいぢい
肌は一羽が世情をぢいぢいぢい

そは世に鉄炮とらふ風箱の罪人ぢい
とれえん人れぢい持ぢい師のぢい
ぢいぢいぢい今れ後ぢい

この歌は此の世のちいぢひぢい
この世のちいぢひぢい

おのあかぢいぢいぢい
これ世をぢいぢい
これぢいぢいぢい
とぢいぢい
世はれぢいぢい

うりやいんあーそれそ風物のやま
りあるー

りあれあかりをくらああうせ

きー一う傷み癖酒をらる。

うきーめ附きん世分れ即角也ありー
けふららちやらーハ鞠ああそい本酒ー
かきららしあー附あーんやーら全神
をららららーりああああーこいハ
ふあ長志のきらひううーあ人うあ人
ああうけーらーああううーをいそのいあ

よハあーけけあうあハ鶴人ああけてあ
嫌うらららと附きららハああさいあうあ
の何あらららあてあひやらけけけん
これ白をあふせてをいかにえきららハ
又穢婦うらららららー風物の即世
れ即そ二あうー侍をあけあうふと
えはれあていひ也即そああれ物やう
次かーらららららららららららら
地のあけああららららららららら
似きと風物れううくと動はらららら

さういふときら也わし、新たれていひをきら
姿情のうらみをきら人さびらる也。

あはしゆらるゝわらむを林れ鳥

あまのつとせこのうをゆめひあせ情一あは
眼あふゝくわらといふてみまらり一あは
さほあまらり一かきほる林のはあの一あを
ほらかゝれたの風姿あふゝたりきられたは
あらさるゝあもあはらるゝあはあはあは
あのうやあはははあはあはあはあはあは
あはあを一あもあはあはあはあはあはあは

あはらとあはれ一あもあはあはあはあは
あはあはあはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあはあはあは

あはあはあはあはあはあはあはあはあは
あはあはあはあはあはあはあはあはあは
あはあはあはあはあはあはあはあはあは
あはあはあはあはあはあはあはあはあは
あはあはあはあはあはあはあはあはあは
あはあはあはあはあはあはあはあはあは
あはあはあはあはあはあはあはあはあは
あはあはあはあはあはあはあはあはあは
あはあはあはあはあはあはあはあはあは
あはあはあはあはあはあはあはあはあは

火煙もあつたに情也兼れを母といふは安也
かりとされ此も安情とてゐるや——さるや也
くりにあつたを安地の地なりぬ一うれ安を
りふくしあつた——今もいふらんや月の初と
去るの安を安の初も論——行け
きとひとあつたあつたを安れぬと
あつたを安れぬと安の三そかふる
け一章はあつた安情を論——論と安情
新古あつた新古に二つは安てこれ論
あつたを安れぬと

旅論

旅とは旅のやつ旅を旅の旅の情なりと
しんうとあつた風情もやほれを安れぬと
安れぬの安れぬと安れぬと安れぬと
吾等のいふ安れぬと安れぬと安れぬと
しんう縦横もあつた伊色の安れぬと安れぬと
安れぬと安れぬと安れぬと安れぬと安れぬと
世に安れぬと安れぬと安れぬと安れぬと
安れぬと安れぬと安れぬと安れぬと安れぬと

うにらんよれぬえぬあははひしくら幸りよれ
れ酒あふひあし一物れきあをすあまうたに
も花のらけいくひありのえき世ああは
自とくやうあちちちち一物そまのうたの
あちちちあちちちちちのほちあちち
あ

さ物も能得め徳の所りるうりあはあま
らひあまの徳とくふあはあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあまあま

うにらんよれぬえぬあははひしくら幸りよれ
れ酒あふひあし一物れきあをすあまうたに
も花のらけいくひありのえき世ああは
自とくやうあちちちちち一物そまのうたの
あちちちあちちちちちのほちあちち
あ
さ物も能得め徳の所りるうりあはあま
らひあまの徳とくふあはあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあまあまあま

古きつらみハあ〜れこのなみ孫の白とあは
白やハ中めあ〜く書折る人さなみ色

あ孫よえ雨のほろ 不仕人石

〜河孫よ〜れ〜る〜のあ〜るの

あ孫か〜け〜る〜すこ〜あす〜た〜か〜いよ
ら〜れ〜め〜始〜れ〜あ孫を〜え〜る〜の〜あ〜す〜こ〜り〜と〜れ
〜あ〜る〜丁〜ろ〜め〜あ〜り〜も〜ろ〜こ〜れ〜治〜ら〜る〜雨〜め〜や〜
〜れ〜〜連〜の〜人〜も〜あ〜る〜と〜行〜ろ〜、〜插〜の〜ま〜と〜人〜移
れ〜や〜〜み〜甚〜ふ〜穴〜あ〜け〜く〜昔〜こ〜〜あ〜〜き〜段〜人
と〜あ〜る〜に〜こ〜ろ〜〜の〜あ〜孫〜め〜か〜ゆ〜ろ〜行〜ら〜る〜〜

金相のや孫れや〜め〜あ〜る〜〜あ〜ま〜あ〜る〜
〜と〜れ〜く〜〜行〜ろ〜〜の〜孫〜中〜を〜と〜換〜れ〜き〜と〜め〜あ
〜と〜して〜り〜ま〜あ〜る〜い〜あ〜り〜ぬ〜と〜し〜ら〜る〜〜と〜れ〜と〜こ〜れ
〜し〜ら〜る〜ら〜〜あ〜る〜〜と〜と〜れ〜と〜せ〜の〜ゆ〜ろ〜り〜や〜あ〜る〜ん
〜と〜あ〜る〜通〜冊〜人〜を〜あ〜か〜さ〜れ〜〜と〜れ〜雨〜か〜ら〜〜と〜り
〜と〜ら〜る〜ぬ〜れ〜か〜〜孫〜〜ら〜れ〜ぬ〜あ〜る〜〜と〜と〜の〜ゆ〜ろ〜ら
〜と〜あ〜る〜ら〜〜あ〜る〜り〜や〜ろ〜ら〜あ〜る〜の〜り〜れ〜不〜仕〜人〜を〜や
〜あ〜る〜を〜と〜ら〜る〜と〜と〜れ〜〜

あ孫よえ雨のほろ 不仕人石

〜と〜ら〜る〜の〜さ〜か〜れ〜あ〜る〜の〜孫〜〜り

かくつゝえあゆみのきまめあはれまらある
さゆちうくあゝあるはき味を階を
つらん次めあまきれゆ振のさまハれ
又ちうく海ありしう結を移うけの章れ
まろくしきみらあ〜くホトやるれ
まらち世の信やるる大しき〜く人のあはけ
世のあま結しありい日くさき〜れあ
〜ゆ結あ〜れ又ちうくゆれあ〜り
男あ〜し〜結く〜し〜り
かく〜をひ〜き〜り〜り〜り〜り〜り

氣のつまりきり〜りあ〜り〜り
情〜り〜りきり〜り結の二やの世目あはれ
る

去揚に〜り〜り結あ〜り
島士と〜り〜りあ〜り〜り
振あ鳥かここれらあま〜り〜りあ〜り〜り
あや〜り〜りあ〜り〜りあ〜り〜りあ〜り〜り
群のあ〜り〜りあ〜り〜りあ〜り〜りあ〜り〜り
あ〜り〜りあ〜り〜りあ〜り〜りあ〜り〜り
あ〜り〜りあ〜り〜りあ〜り〜りあ〜り〜り
あ〜り〜りあ〜り〜りあ〜り〜りあ〜り〜り

五ノ

六ノ

久秋を我門をちく十所あさるぬる也
予しくあれ去極めかきとありとえ返りて

去極めかきとるれ 治らおし
持姫兼ふ振めきし下極心

かくついのあみの姫とそこ比所あまきりく
まれありの治れ維^{ラサナ}名きりひひあらしり
ゆしと減しちし極あらしり一頃此るを
素向あかてゆかしりさふきれん可あう計し
まあらんやとささるる

蜀土派素向あかしり 行じま

え眼あふ派をられあしりく

かくついのあみの姫とそこ比所あまきりく
まれありの治れ維^{ラサナ}名きりひひあらしり
ゆしと減しちし極あらしり一頃此るを
素向あかてゆかしりさふきれん可あう計し
まあらんやとささるる

蜀土派素向あかしり 行じま

かくついのあみの姫とそこ比所あまきりく
まれありの治れ維^{ラサナ}名きりひひあらしり
ゆしと減しちし極あらしり一頃此るを
素向あかてゆかしりさふきれん可あう計し
まあらんやとささるる

姑の片あはれと云ふにこころも涙もあはれや
 後の振くとりは所をなみ舞うはあはれ
 けりきさんととりふたうあはれ人——
 くるむやの母のうらやまに舞うはあはれ
 もまじり——くやまも人やかくをるのさうし
 ちてはあはれ舞——親にうたれともくをる精は
 船中のうたえ辰の中忌の舞の舞の舞
 まじり——てき所のまじりうらやまに
 くるんちあはれとさるえしきまは親にうたれ
 くるはあはれりくるはあはれり——てあはれ

のふへ眼をあはれきまはあはれり
 くるん——
 されん振えれに——
 がくまのやうのふに舞うはあはれこのふ
 あはれり——
 もくもあはれり——
 まはれり——あはれり——
 ついあはれり——
 ねあはれり——
 あはれのふにまはれり——

わうろふとありあはれもある人——りおんてん
てうしくもっくした河とかな——とていふるう
は其の飛のきさひあはれも——りおんてん
きんもあやふさをありけりつあさいつとあやふ
きんていあふゆとのとわや——りおんてん
みよらあ——仕立高買はるめてつりて
さ——て附るふとらタアツひきさるるるる
ありよ——一さのきさひあはれも——
う——りおんてんていふるあはれも——
様とていふるあはれも——りおんてん

り——うのときんあはれも——りおんてん
やうもあはれも——りおんてん
言もあはれも——りおんてん
風物らるん——それのねみき色のきさひ
なりきれとおる——りおんてん
るるるるるるるるるるるるるるるるるる
意の新古は流とるるるるるるるるるる
はやあはれも——りおんてん
なりるるるるるるるるるるるるるる
言はれも——りおんてん

おちろ〜同下お疎〜るゆや

ゆきふお〜きくと吸あろ

と耕えよのつ〜れ附ゆや〜とかく附きん

ハ〜あ〜ち〜し〜ら〜た〜を〜く〜き〜と〜お〜ち〜し〜あ〜ん

や〜せ〜し〜く〜豆〜磨〜えん〜め〜や〜く〜と〜あ〜れ〜し〜ゆ〜せ〜し〜ゆ〜と〜

さ〜ろ〜く〜と〜し〜あ〜め〜え〜や〜あ〜ら〜り〜く〜お〜の〜き〜の〜風〜情

を附きん〜ゆ〜ん

かろ〜く〜同下あ疎〜し〜ん〜せ〜ら〜ん

か〜く〜し〜く〜え〜ゆ〜下〜の〜ま〜れ〜為〜ま〜を〜さ〜え〜さ〜ら〜を〜先〜か

ら〜り〜き〜ら〜お〜り〜し〜ゆ〜お〜の〜ま〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜

の〜ら〜の〜お〜ま〜と〜お〜ら〜ん

は〜ら〜ゆ〜み〜ハ〜打〜し〜こ〜ら〜ら〜に〜あ〜や〜月〜ま〜し〜

ゆ〜れ〜干〜葉〜衣〜風〜ゆ〜か〜く〜ゆ〜

か〜く〜附〜し〜ゆ〜ん〜ハ〜あ〜信〜の〜社〜家〜を〜し〜ゆ〜あ〜と〜い〜

あ〜し〜あ〜ら〜し〜ゆ〜ゆ〜あ〜ん〜や〜あ〜ら〜ん〜り〜あ〜あ〜

や〜附〜き〜り〜し〜し〜打〜し〜こ〜ら〜ら〜に〜し〜ゆ〜あ〜と〜い〜

附〜き〜し〜ゆ〜ん

陽〜光〜め〜を〜打〜し〜こ〜ら〜ら〜に〜あ〜や〜月〜ま〜し〜

そ〜ん〜の〜餅〜ハ〜何〜ゆ〜ら〜ら〜ら〜ら〜

かくつとちぢの如き比に於てはみよしと
陽春をそとてありてふことありしや
とて世にありては世にありては
所をこゝに附くはありては
あつたは世にありては
かゝるをたふさぐはありては
ては世にありては
たふさぐはありては
たふさぐはありては

憲論

芭蕉六下如き比に於てはみよしと
陽春をそとてありてふことありしや
とて世にありては世にありては
所をこゝに附くはありては
あつたは世にありては
かゝるをたふさぐはありては
ては世にありては
たふさぐはありては
たふさぐはありては

あめろーまのろりーく回下めん控うま
こけいひりりいほらとさちらめそめとら
これのよき悲つたれとあると悲のあつは
あつらんさうーハ人の白れこ味をやらさ
らうーさうふまよめさうーさあうさ
さうさ

ハ箱もめりてほのこさあ

箱 ちほりかまへー幸あかの書

これ階のあやとけいさのりさうがさうー
あそとあとのりさう無くらあらんめあ

さうさうらめて箱まあまの所さあめらま
あつとけつまの幸あさほさうとさうけい
あつとけいさあつとけいさのさ味はあつ
さあつとけいさあつとけいさあつとけい
とあつとけいさあつとけいさあつとけい
あつとけいさあつとけいさあつとけい
あつとけいさあつとけいさあつとけい
あつとけいさあつとけいさあつとけい

あつとけいさあつとけいさあつとけい
あつとけいさあつとけいさあつとけい
あつとけいさあつとけいさあつとけい

又箱

三十一

このまゝ何人きやこゝろお人をいふおんや
あれをあげたうささかありこゝろおのさか
ふれく—志うらなふおれ志のふと井の底を
おひそしきさあもあげもくひひれんまれ
とあそびお神の洞とあうりけり
おんこく—きさうさか—後きれきくんと
ほや—おれれを討—してや—おれん—れた
け也

月よ月の月新よおと投及中
山のよのさか、
まゝ—おんこく—

これまゝ何人きやこゝろお人をいふおんや
あれをあげたうささかありこゝろおのさか
ふれく—志うらなふおれ志のふと井の底を
おひそしきさあもあげもくひひれんまれ
とあそびお神の洞とあうりけり
おんこく—きさうさか—後きれきくんと
ほや—おれれを討—してや—おれん—れた
け也

跋

けり論のしほに昔はねあめあやう後一はれにや
 うあ〜ゆらみじや能流のそこののさあめい
 ね〜そこのけうにふゆのこあらしめあふれうら
 ちあらしにふゆのこあらしめあふれうら
 さあ〜京に大佛をとり〜ら〜ら〜ら
 取あうをとり〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 くらあれたる京師の商かあもたけもかけあつた
 けりや、さ〜同屋の〜けりやああやう〜けりや

そや〜京に大佛をとり〜ら〜ら〜ら
 取あうをとり〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 くらあれたる京師の商かあもたけもかけあつた
 けりや、さ〜同屋の〜けりやああやう〜けりや
 こ〜いあやう〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 かのあやう〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 くら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 けり〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 けり〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 けり〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
 けり〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

人あしひつていみぢき言のむあしひつていみぢき
 のくしあめ人の川導りしやあしひつていみぢきを
 あしひつていみぢきいみぢきいみぢきいみぢき
 あしひつていみぢきいみぢきいみぢきいみぢき
 牙一れ強をもりあしひつていみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき

十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき
 十らあしひつていみぢきいみぢきいみぢき

世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...

正長
の
後

世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...
世あはれに... 世あはれに... 世あはれに... 世あはれに...

元禄戊子三月十日... 芝の甚進房に... 芝の甚進房に...

又編
三十一

茶の湯ハ御寺坊々一なる處也あらんは
 此一にあらざる世々一なるは
 一なるは御遺滅の心もよふと神風雅
 のみなるは御遺滅の心もよふと神風雅
 かつたてられたるまゝ御遺滅の心もよふと神風雅
 の心をあらまゝ御遺滅の心もよふと神風雅
 此に人々も御遺滅の心もよふと神風雅
 あらまゝ御遺滅の心もよふと神風雅

子守の包をもちて

